東京教組　　明日からすぐに活用できる授業講座

2016年度 第2回　「目から鱗の漢字の話」

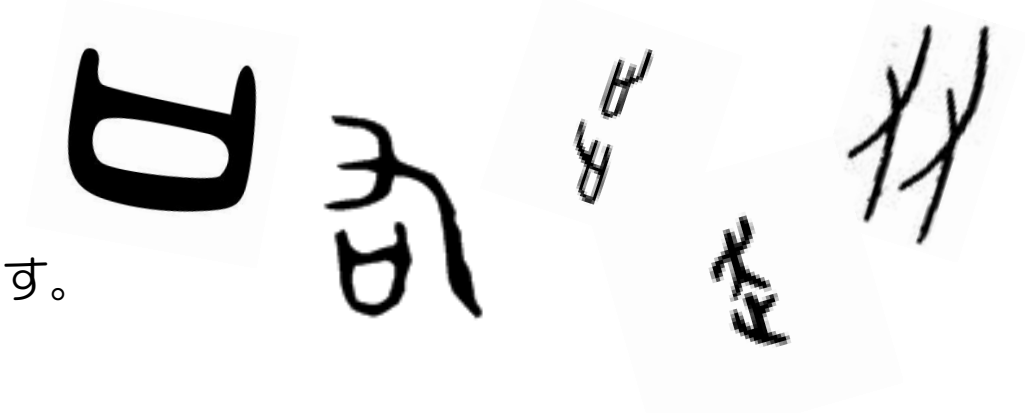
漢字は覚えるのではなく、アカデミックに理解するのだ！

今年度のテーマは国語。第二回は、漢字指導についてです。とくに小学校の教員は、漢字の教え方に悩む人が多いのでしょうか。ただ単に練習の仕方を教え、ひたすらシステマティックに教えこむ、こんな苦痛な時間になっていないでしょうか。しかし、漢字は、その成り立ちを知り、古代文字を見ていくと、とても系統的にできていることがわかります。この字とこの字にこんなつながりがあったんだ！と目から鱗が落ちる話ばかり。さあ、これを聞けば、明日からの漢字指導が、がらりと楽しいものへと変わります！！

日　時　　2017年1月28日（土）１４時～１７時

会　場　　東京教組会議室（日本教育会館２階）

講　師　　天笠　敏文さん



※裏面に詳しい内容や会場案内が載っています。

天笠さんの漢字の話はこんなカンジ

以前の天笠さんの講演より

成り立ちで考えよう

漢字の造字法の学習では、「表」と「裏」の説明がありました。どちらも服の襟元の象形である「衣」（ ）の中に別の字を入れて作った字です。表は「毛」を間に入れ（ ）、毛皮の着物の毛のある方、即ち「表」を表します。衣と毛の意味を重ねて別の意味を作り出したので「会意文字」と分類されます。しかし間に「里」を入れた（　　）では里の意味は関係なく「リ」という音を借りて衣服の「裏（リ）」を表した「形声文字」と分類されます。こうして古代文字までたどると、自ずと漢字の理解が深まっていくのを実感しました。

また「王」と「玉」の違いも説明がありました。王は鉞のような刃物の象形（　　）で、玉は玉を３つひもでつなげた象形（　　）です。似ていたので玉には点を打ち区別するようになりましたが、もともとは全く違う象形でした。

合わせ漢字の場合、多くの王編が、実は玉の象形なのだそうです。「理」は宝石の条理の意味、球や珠は宝玉そのもの、環は死者の襟元に置いた復活を願う玉であり、王とは違うことがよく分かりました。王の字が基になっているのは「皇」「往」ぐらいなのだそうです。

子どもにはごまかしではなく、本物で伝える

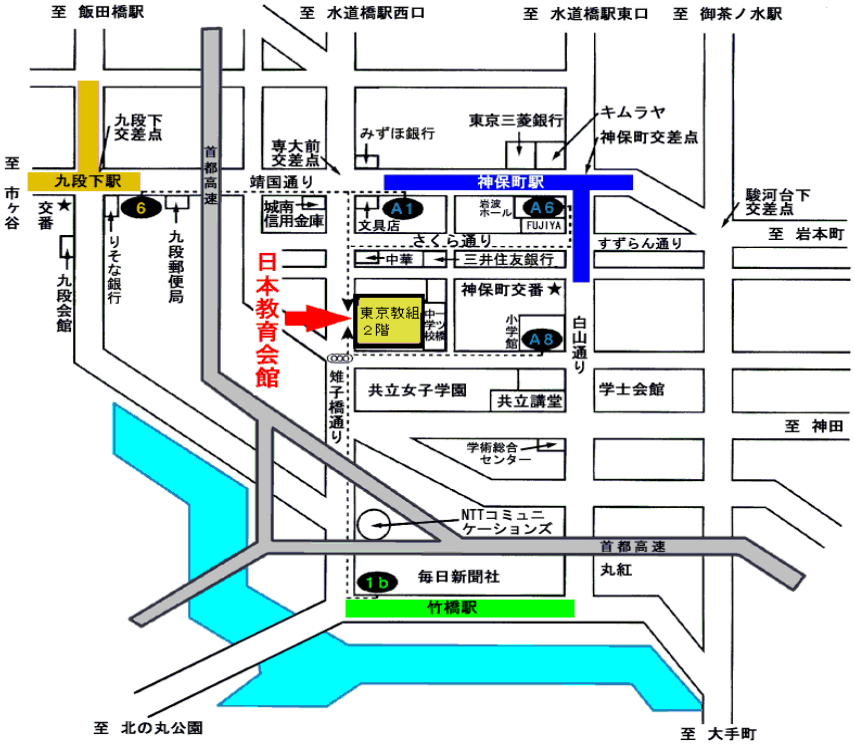
このように１つ１つの字の説明自体もアカデミックなおもしろさを実感できるものでしたが、白川漢字学全体の話もありました。それまで漢字学は、始皇帝時代の字の分析を基にした解釈をそのまま引き継いでいました。近代に入って発掘された甲骨文字や金石文字まで加えて字の成り立ちを解釈したのが白川静だそうです。だからこそより真理に近い本物の解釈を行うことができるのです。子どもに本物の歴史・成り立ちで教えることができるのも大きな魅力であると思います。

《会場　東京教組会議室》

（日本教育会館２F）

地下鉄神保町･九段下徒歩５分

問合わせは東京教組　03-5276-1311



ふるってご参加ください！！